大坂独吟集

西山宗因点取

十万句 下

特別
へ5
6047
2

鹵山文庫

アヤキ
ようこ山

56 4097

擬吟

くきめを海ふ者ふきのあ
らーはのとしてうはたの
うんといひもあつまふ光貴豆
腐うわ見ーをそーとタ
ゐこの所をとところわるゐ
とちらをハ落る血のかこさ
乃白川よりもはあして
波のこのつ志のあてこうく
ねもひよわぬ

舟々子
由平

異のあるやあ[illegible]
[illegible]
外月こかるすわこきし嵐
花ゐ井ゐの夕日もきこそ
花色の先ゐわ秋の夏ゐれて

能ゆく屠をこもの孔の未
えんのまたのはてこの月は京
ゆうさやうかくるる和風の彩
おもしろのの孔はくーや秋のかこ
其の外一魚鱗のうるくち
ウ
決こおるの其も秋をうくへられ
社代のうるはもこれはなもや
いまん人倫よ元和氣をつこ
つくをれるる未世の秋のこそ
だいくもうけうきせよ月をけて
吹矢の先えよう新秋風
蕎麦屋のこまるかあはらんせよ
月をそもいてきはひこそ

つきあひも山寺の清きもの彩
稼ぐ斬蛾るるあの新風
つかぬきに年性蕎麦やとちぬん
梅よりきに細工くし
下極のこのをそこふ兵尺
山陰よりも年よりすこ夜
二月二日よりあのまそら
後芝居のさうよとそかう
まへ髮ごそわかまた
二
秋のあと踏くハ情すこ消て
いなかのこりの徹もこ
死一信をなす世金家る
見行のよこよりねるれねさせひ

嶋のき彩端よつよきけつたり
乱いなもかなて住る月みて
子規さろさ庵よ芋ろ月ゝ秋
ものゝてあゝきゝものろ春昏も
八重九さろもち成推ゝ世まよ
邵翼健をろこゝけて生みこ
者ゝて我せこえる魂をこけ
意長おるひゝつゆを吉ゆは
あゝゝまうせてかのうゝ
てゝめよてうく世後我ゝ彩
とづいゝゝ来るこそ代の吉江

二ウ
物ところへ法つと押込れのかを
ゝこゝ物ゝ月年のもゝゝか思やゝ
異すまは彩鮮恋のえれまても
うの鬼さやくうゆゝせうよちち
物ゝてゆけハ抜ホえるうし
秋迫そやりてと夕ゝるの元
酉ゝ方そ十万貴月一ゝさは
入ゝる〳〵おゝんさ松ゝ
卑彩物ゝ者ゝ分をさして時雨風
法ゝ代ゝそてひる月ゝ表
鬢つきも生ゝけよ秋のいろ

家の志ゝ[illegible]をふせゝと
雖ハ花の安寂に関越て
きのふもこゝ人おゝるふるの
不堪の酒のうゝに飲すゝ
志ゝ志ゝ迷ぬ胥乃七賢
酒ゝ志ゝ[illegible]
活変うとれるのほゝ[illegible]
極女のゝさて論よ[illegible]
孫多紙とぬゝ[illegible]
弥一ゝんのゝとゝ
わゝまよわ姫書を去る[illegible]
又あゝ板とおゝよ賢ゝ

遍境や志ゝ[illegible]
ゝわをつゝ[illegible]
身神も[illegible]
天竺震旦ゝ[illegible]
大きゝもやゝ[illegible]
あつのひにをねちる身氣
三ウ
ゝもゝ世ゝ[illegible]
羽織の下ゝ[illegible]秋雪
外あゝ勝ゝ[illegible]
湯ゝけつる板のむゝ
ゝゝゝ志代[illegible]

さて京ちのうき山伯きん
たせうの祢ふ風ふ風もあ
ちりさつのよ花の手宿
そ紀乃人遠生風井れ春とた
ぶらうめきるれわの元
什鼠をくまくのはさわさ
ひのとこそいうもてやしう
三枚のうまれやよ月の雪
氣味秋のれ乃ちわ合
名
うの大乃まされ風村雨
紅のけて徒さや萩の下た

火赤紅さう風の色有
ちきたとと風ふうる
ひ月るちまやとのすし
ノ三乃人れそひつひ天の戸
ぬう行も時雨もひよりて
孫次の行れ計よりわり
人行のうますすこ風の
猫さうなるなる毎人
雪かのいと行あ行ノウ
雪れ山紅もくちへかるま
照月の休も若へさうノ

湯漬も[illegible]

ウ

神[illegible]すかたちゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]の事ハ[illegible]

[illegible]行事のちゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

愚墨六千句

長世七

傳[illegible]

[illegible]

紅梅一句[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

墨之判

いと小く先月をうるうり小
見そ名ゐる天満の宮
よりき物のにるふれ服
まあちひ柿ふぬ物のき
らひのさ蕎をもとめて

舟夕子

由平

芋掘る人仏そ月元繁よ
風情すもて月とよ久物ふ
屋根と成く川元
秋風や腸胃まてゐぞめん
直ホ子丁物張の夕爲
蔵遊る代屋戸れへとは
てをひ
こりふや世ハ一るうさ
とる元

ふるわ赤まくこそ月の見ハ椒
屋ものつこよやく老者とふ
胡椒の粉むせて於代郎と
ウ
茶餅のそこか家かしく爲
紙屋わさと呼ふと仕ふ
そこかこ
ひろのうくく根ぬけまし
うつり蓼やぬるちとのうち
いやつういの新ゆの山
たんうよいそよそるもの人位
屑をうこあ入れのの
あるこやりするの化ハ
嘗こ基又まいつ筆ハ坊

おせきこつた一遍紀月記
たるるかゝ（上戸）ゝ猶し酒のうん
仲九郎（上戸）よつちんゝゝ
花のあふゝ天要の結ねつてめて
延寛二年行角ゝの
二
まつ代そてとろよ造る勝ふさげ
禅の山ゝも毎ひもまて
ねとりやかつともつきぬこゝ仏
我ゝろうりこそ法神をせん
ゝりせきこゝやゝまりけち
もとれ法とはちゝふゝ

元義の泄法もそつゝ弼を
地獄おゝし（浄摩義義あゝ）をうゝ私といかや
ぬまのみたゝへいるかる法俗も
うこをとゝゝりん布施のゝを
あるこ法ゝ弼をゝれ法袋
こゝとせうゝの角ちま
ぬるこゝし月もきひきやゝくらん
ちのの及仏世侍のてとこやらゞ
いひこいゝゝいるあゝゝゝり
僧侶を法のてこ法てはへと

せん手みや入婿抱き八
高の事は茶臣稀見能も迄
つまつ其の返をまし
かへる弊の枕乃下露
細ひろそこらしく待まそる
十宿ろやきさ荒かれとさわ去秋
みさらかへくおもらん
高主みとけん汐戸のうち風
鶴もやいやくあま六夕ちち
夕ようらり婦るこの花茶の月
細工人祖師西来意生うて
脆るさちぬる小刀の先
旅道をき杉葉のさるん花
化も感ひをわれろくく 塩
あ枝の掛て紙らくゆすれ紗

妻手ら倉見ちも子ら房て
あ限まうときうの人浄菊わ芝居
くやわくるちりてれてくもえ松のし
釈にう菊もるはきくる松風
らつそわとらそかくてうきみ鳥
その栄をつくわりきうらいの
やわらかも立のくせあのわげうれ
きつしみきいて思はできかくなし
まて成め園の娘てよいつのまは
そ侍せらての旅みりま
千万里へさつてろも不惟かつ

たゞひとつふあしもあらハれ
よこれあし白ひ釉めて八むら明し
月ふ物そふろなき風をうけて
三ウ
ほ(?)ハ芭蕉葉ふまらんかと斗
蓮の春の雨ておちるれ葉残ちる
大祖もきりをわきまへ
狸のこゝそ与七おもしめ
奈良風とさう都ま法通
杣くだりつふよりそり墨ぬる
むかふくるし春の月もあハぬ相場の
人参まても療治めすましてひんろくしふ及ぬ法子人
門らかけきとろろさ毎凡ろやうて
刈てハかへつり一夏手形子
逢坂山ありくづつやゝつきまん
うるゝとれまんをくるよりある

おそらくも君へこなしハ一ニ三
ことつゝまいふさうつきれ新
むしの声みえとり下女ほまるへ
庵したふてよ立まよれ春
すそよまうまかさおろし
花を掻それ枕をいりそて毛抱ゝ
岳埋根り雨宿名の犯人ふ斜
小蝶をとゝもとんさ他ちの
名
のゝ猫よちの桃をやしてさへつせ
換骨羽化しるる白旗し
初庵くちとるまる枝のあし
むかし生あまて宿の墨不
すまるきうく夜よのふとおし
本字二字をそへてふ今とし
月うけとの内へほまんを物見ひさや

とをさくかよひさうんこそく
なくますくあくまれきろい嵐すら
法師みやせあれむつさを
手習れまぬまさふ二つ太郎
そのきつさきて天狗とへよ
二刀のむきしかやふうう
むかしく城をきてけりしやん
花月かあつらは夜なる 天狗さうし 人まぶ山
巾見え志ふいさらの松風
月千歳あきはそてきるやまひ
されば論をさつと来座の前
ウ
外るにの方まなせさう萩落
露義山稜乃久されの秋

七十の翁まで去る摂州住
ゆつくりと代をミつの渡松
屠蕉白数まちこひぬる人花の もと
つれその以下京あまくるわ
外わとて武略さ目くらこひらめ
辞世に一首なくば狂歌 万歳楽 御
万歳楽八関東までも

愚墨六十一句
長丹九
西 梅花翁

句毎子園をおもろし 是しか
それとまぬひくる付合もち
西鶴まことのまく

俳諧の道辛亥の下比去秋
いまめく去氣のさゝぬ百韻ヲ
著てんの上梓清まりて鐵
まよての蕉行のねふこゝ擢
花一日おのつゝえの修覧

未学

鉄新の花のあゝしやうこゝゆら
蕉翁花尾さもあらし
断も荒よ荒の一附
和多氏潮ちひかさる断一附の大ほ乱
鶏汁とさゝふミケの月入て
又ゑゝとの風そ起こゝく
猿すかける鐵のいきかひさるもく
虎すむ行の荻つまの影

毛里り道そ股ちたまれて
巻つくりてやゆ鼻とぬん
中天物こるやゆ(ウ)とひなり
枚のまよ女為ちまひまよ
たうら旅立すれ月わて
立つの毒ちせんこ乃ぬち
すり特のすりこすこる神ハし
特の牙より物れあこきあちこ
あこ立海のぬき衣ぬ付て
深川としよ紙ものすりこすもこ立ちあ川こ
をのつくこ手つこてよひせんき

猪ちゆよへのあハあちよ
同のうこときこ立ち人れ所会
内麻長も麻よわるふ面
ふれの男乃ら奥ぬれ祭
男ちて男ませ京猫ち唐
神御の主ぬ男ぬ埋ちる会
主のひて物る戸やきん
ひつんこる男ちこんの奥せ
大ユのうまつちる立やこ
命ちこ掉ちるまぬんきし
立逢男人泉ぬ
山鼠ぬ文月を拘ちんあちこ

鼠紙のおもきをつるせるよの
（鼠ノ屎まじりていろのこまる）
きうとなまるる鶴つひのこそ

大井川田毛庫成絵にて
（ひ絵れるも弦のくくく）
ありわけ せつない一ワ

看板の詠きけわらはも
関所のるれ紙にすりしや

やりませ切り屏るは月とのせそ
（はやめんしのくくく）
うとも物もちめ作物う秋

二ウ
山里の小庵をうつ冬庵
一むくる霧まのくぬるまひ
ゆ嶮やうつそさうとも秋の夕

いせのうくくんをつるそ
ゆくくるりとりとすれてゆう
七世の孫うとうつうとと
つるうわく福やくんめ成つむん
（代の福を双の一ねし）
影のとくまそ月長ゆも
（影もきもつ月てうるゆ）
まとうはあるもうるゆ
（月ゆ）

まのう月うれ　三ケ條
（三條の月ゆるは初ゆ）
うわるゆ紙名ゆ流るん
（ちちのひるくくくん）
まつ毛の毛をくくゆ雪
法けのゆ程元の史をとりて
なるれくわやうゆ務るれ

如方うすむ一重は宮とうせ
宮かひたうの日ぬ
来れたれら紙屋紙
あら射いうう夜のすてきら雲る
ら紙ひ宮ぬ
鶴くたる山の根く
生き山鶴のえるの彩して
生れ屋つふくわるの面りて
義経面ハ
毛田厳にそねふとさひき
桜ひ鶴る常盤
きりうねふのいさき
いとうひこそ山れ立の重箱を
あわけなんのる梅つかりせて
たうひくもも我今せつ
鳳刀の金佛をわりわ
寄子うるえ作金

雲のつるひもけの羽布
むりあうぬはそれ浄もの月
行も時代の秋見そく
二ウ
地ゆるれ敷の柳うもて
鶴てのむ月の風南うひ
ありやきとくわ雨降うえ
相みま詩よつくつやえ迎
衣きぬら山の雪のひよ
白天ぬ
時うところひあつか彩わけ
なるれ面よく風下踏のも
ろあや世面のまて和ひ
のどくと神あ山川ろう

一体は風のみ体小猫さし
まこくれたるに猫も扨も
月そのあるめいえてお行て見
いの字はつらさ迄乃末風こ
のうるるいやうはさらしん
こくとうきこんらし
うわぬまにたひすのかく
名
たうぬき式人形らきこるる山
ふのわうるのひくこもれ白やこ
天しかまちつとえんはけつついて
すくすくと延生やうしこ言
あうい羽とうもね一りさまよ
帝教天ようあれう
ひうふるやはよるこ係の松

富士のけふうハ猫をみこそ
うき世ハきのわきうのおれ落て
山桜たくと人らみなり
月つひのたつこのうやたるん
書ふわ坊よ川茅ぬるとハ
物ひきやうひのたへるまれ
かうつ物よ秋をしるし
紀のくとこ山のあるの日
ウ
たうこ形は朝の形ノ
たうこ迄と初りてあの信ん
妖院の毛伸ふせられ

これも又いはせていぬるの
鉄かねかあまれてしまふ
捨舟のすわれてのこる磯名山
生死のうへハたのまれず
やかてとねかひのまし風さそふ
高ちる子のほゆる竹の子ハ

愚墨云　平十二句　長廿六

梅翁　判

人道ねぬ塊につかれる
ち秋の比ふくて花きつる
作意に八世の哀なる花
おこる気色も花のうつつも
春とは思ふくて花の色
老われのひらめやあらん世の人
きこゆるかな人

俳諧の小老やり
句我抱硯にむかひての
又々字なまのに

悦春

さいはさして天地まろめし
浅袋より風
何さま粧飾する神くて
我里のみもあすハおてり
うき波あしをさして乙飛錦
浦の苫屋の門たたく声

月をとるるあしの上よりたれ
わ屋ものまて秋のタくれ
ウ
白雨やあまもやとる海とあ
蝸牛の角乃先やまひきり
低乃ゆも芦のむひまて蛍飛
代々一万年より弥乃山
低れらちくむ
磨尻のいけまれ仙人寄るか
いつまもきりうりう仙さかハ
さそのあるハ穴へさいん
金和よはあ海の底ところ
めつさ穴をるもの
夢乃丸ものハうりける旅
初鰹ハ海よりおるあつさをへその下
魚ものハさめやまりて條熟ひとく

尾上のうゑ一すの秋
されハそへ一すの魚元秋のおるきんぐ
ちつちと風新赤き横の風
一すハ尾とゆつれるあめ
たのつくん人ハ
様の尾毛
大りくひひ
横尾毛ハ横ゆるまゑ
白玉の横をあけかの
横形をえ知らる
三
三のみ
歳たまふ大ものるる白
判夜夜乃おるの文
さそハ芦るハ大陸のくやや
高ものたく俗西方のふとろる
ものくまた横牛まえられいえ
たんくあ
みるれ芦ものくなし
蛍ハよ糧虫ハ和ハ
蛍屋易ものても田井の涙
成ものハ芦ものくれて

頂礼したてまつる地蔵をふしおがみ
佛もおなじ発願なりあり
いかなる者なりとも法の偽まことなれば
まうくと擬して
かすみ山坂道又十丁
先宮とかいてすみてくやまと
なる籠りきもあなたうとひ
ものを雨乃ふるみるく
ものをあひみるく
後のかりはうるはしまいすすおも
おもはれる高山とかのわけん
ニウ
ものの奈良なる布袋大こく
あまの戒天庫とかいてやう

頂礼の区別八生発願
天上界命下行法まとかうこうこ
秋山
世ゑるも摩訶ふくまこ
法滅と苦因乃あいのもちさよ
浄土わよ不くやくあんん
ものよくのこつ伴いくせ和
絵とかの役いまわりるよ鞠
仏菩薩あしたそ物ひけもを
説法の紅根の国をはアト
服ものたまはやのうこのう
不之ようさくあこうるもの酒
さてくあのうきはうし

蒙まして梅のハ月廿五日
石見の山城たくらこ地
うこきなき代このむりもあん
炉端の杉屋腰うけ乃上
茅屋にてもきよせて云隠て
醤ちうちう醤ゆんゆあるこん
付さしもるを杉を小毒なし
百草長毒ふくあやまりく
寝ての気付の鰯乃汁
の蓋の物一塩の肩そぢ
蕎のそ形の赤ハ神の杉
養一 再よ 緑の蝶
一書却りく

いつまの哥まの切そ男よ入
ぬ安の茅ちる小ひ分みて
ひ人の事ある小ちの浦風
二月
鰯まるもなるやうちの山れも
物のまもりたる鶴むれみる
ちつとひろけ毒小毒の扇
時こ交人も的矢をそぬれ
まくをとるめ弟もつく岩の雲
毒孔まよひろ風みく
あるもきいちまこくちる
二上山の狐とけぬれ

雅経卿の撰ばれ給るのふん
幕の先まちよ蔭雲
十徳やタアリ〳〵の月ぶな
衣の棚の仕ゝ勇ましむ
九葉の白ひるたも信濃
さゆ代葉藤よ入てきたりき
名
御歌くろ代ひよ御ろまの名
御ろ歌の名ひろやゝし
八百八ろ島ゆ波を無ひ給
うき御ひまを上の御代数
なまか御ゝも入れろよ
ろ御ゝなの歌よまつらひて

武蔵のゝ月ゝ
幕御のあるゝ水も見さい
御代のあきよ代久ゝ也
あゝ月いゝよいひをゝ斗
うちあとのきまゝ水系
武ゝつて古ろ形て金鳥
（ほけれ）
大名風のあゝ御ゝひよ
御金の岩七つまれを立
うも稗もいゝ西世神
ウ
法華の経ゝまゝて歌ゝん
清土のゝ失ハまゝる御

大國八洲の里より梅て
天物能りはえのこゝ
三熟のひろくとゝるゆて
氣の和恵をそなへまぶ
義勇を知くもるきを行堅
東西南北の月本の素
付屋敷四十八句　長女一句

ちぎれ八枝の
中まも入ひろくれハ　西義利
庵元よ滿る能さ
舞ゐるゆ

雅吟

重安

紫金七日千代ゝ秋理鶴
ムかしの今まて姫ハ移さく
裏され暗もみゝこゝろゆき
物物は初立こゝろの弱面
厳の月見ゝ本を結てゝ
秋風のまゝ引ぬ中庵
武百儀と丁よ岩こん
小家の無貧ちゝ世の移

ウ

岩城つくりなる小男の孫寅
はる年貢をて一村星氏の十月
芝氏えまうてをうてをうくち
分多毒源寿毒をう所くま
光る鉄心こ筋ほつ辻
小まのや寿人世氏あるのめほ
長寿ちもものるまたう人
耳のあうえれ桃をうてをる
やはさに入きあるは芝長殘
簡略の世をて宣殘星ふきよ
うの表小神ひきちきる月

ふ法くるひぬておとるたるの寿
定奥つうまりくみきりうわる
ちの氏八切 氏氏ちかねうすえ 秋海を参奏うえん

やらふやるまひけあさう
二
満会を永くの日緑松よ
勝をを生ひる我を之の
まはは氏のくを中もの氏寿
数の猪尾やくたいる行
大船のあるかん海理をとくせるん
行ふ未浜るめうほかる
蛤を神を之なるまるて

二十三

俤うけ見れ枕もちらし
ねさあ人を一星捨まて おもいめ唐
つき結合やまむまへ
暮むるまたゝれ死ぬ人生あり
さら夜衣新妻あらし晩
十露盤露藻ち埃掃捨
構の掃除まて月のゆかり
二ウ
大寺ハ浄土流まよわ殺然鬼
念仏の声もちる柳陰
舟を招る宿れたゝしき つきよ
面より涼しさつかゆして

三
なかくの旅道の記をおもひ俺
待さぬ紬形し 初鐵枕り
足痕を雅すゝし山ゆまり路
くらし清すいのち延ハれ
花の下けしまず世につまし
草ふ三の名れ雅いつきぬ
月の声枕ハゆる月あるく記
梅ゆうてみ寄し国まうゆり
花をやめとおかれひ恥さし
けふ氣のゆかりいますまゆれ
雪に降りてたゝれし秋も晴ゆまし

二十四

男たらぬり処思あん
いさよひの月は踊子は柳子きし
百ぬしよき櫻媼さらす（女踊子とききく）
揚鞠とりもりきし花の庭
かりき御子もよなる禱すら
ぬる鵺し嬉しきさ鵺葬乱場
蔦もうしすとくまぬなぬか（めつしく）
さりたる蜘賣憎三緒るか
たし里待福のはそさら花
まつれのこちハすまりし心さ
雑のまくろまけ新まそ

まち越の柳子枳つるハ鬼やらん
せんさく衣ぬるくた提世

押入のあるぬきり比丘比丘尼
人のよみぞもろさそさ
比法なる武者小目飛くる川里に
搗栗うつせるぬいつぬうれつ
親達のいけん実ハきこんや
書道のまつこりてくし
撰集に入ても穢するきの花
動静の男子海女ゆかみれ
蕨城山あるして里さし

酒田の市町今まで行屋の
札賊を押さる事柳の系統な
宮宿しるきまくの後の
あの月巴よめく風湯にて
つつみもの打出し秋
名
名所を望みる所の降地
長下城絵しる法の所
家系の新を飛そ法よりて
させあるる高立のうかあそ
高井ちりあ立ちさら
寄まのつるれ人ふまとら

ちきくも物そろ〜けきたる事ふ
員一軍のあられ義あ
運八天ま但てこまさり
文のあとしきひつ八ね
部録たるこあ立ち度みせん
楠ふ重衣代佐美信おつそきの氏
月衣よりた東の美氏と義よ
高まる水もあ高ひ
新家の物世の事八寂きて
秋まのつり高たるもれめ
生る氏八敵つまあ服し

みやけよりくしたまはる池
紀伊守の子墨の信れたの京
拾の夏うくるよりあふ海
月人を袖を知る新家の内
ぬるるまひのよるかけ雪

愚墨云十句　長九云
梅義判

于時延寶三乙卯歳初夏仲日板行
村上平樂寺